

シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について(3)
 —実験学校の開始から『学校と社会』の出版まで：1896年～1900年—

小柳正司
 (2001年9月18日 受理)

Some Inspections of Correspondence of John Dewey During His Chicago Years(3)
 —On Some Events about the University of Chicago Laboratory School : 1896-1900—

KOYANAGI Masashi

1. はじめに

デューイのシカゴ大学実験学校は、1896年1月に開校した。開校からの最初の6ヵ月間は、試行錯誤の時期だったと言われている。その間の事情については、前稿で主としてデューイがフランク・マニーに宛てて書いた手紙を中心にして見た。本稿では、開校から『学校と社会』の出版に至るまでの時期を中心に、デューイの書簡から浮かび上がる実験学校を取り巻く諸状況について見てみることにしたい。

2. 実験学校開設当初の財政問題

実験学校は発足当初から深刻な財政問題を抱えていた。アイダ・ディペンシアによれば、大学当局は1895年秋に教育実験室の設立費用として1,000ドルの支出を認め、この費用でデューイは実験学校を開設したという¹⁾。しかし、大学当局は実験学校を正規の施設として（ということはつまり大学の正規の機関として）開設することを認めながら、その運営費用についてはその後何らの保障もしなかったのである。デューイは大学当局に1896-97年度分の実験学校の運営費として2,800ドルを要求した。しかし、それは5月の理事会で却下されている²⁾。そのかわり、1896年6月には慈善家のリン夫人 (Nellie B. Linn) から2,500ドルの寄付を、7月にはクレーン夫人 (Cornelia Workman Smith Crane) から250ドルの寄付を得て、1896-97年度分の実験学校の運営費に何とか見通しをつけた³⁾。また、11月には金物商のバートレット氏 (Mr. A. C. Bartlett) から56.37ドル相当の大工道具一式の贈呈を受けている⁴⁾。

1896年11月23日付でデューイは、大学の出納官 (registrar) であるトマス・グッドスピード (Thomas Wakefield Goodspeed) に宛てて、実験学校の1896－97年度の予算を書き送っている⁵⁾。収入としては、上記の2人の寄付が2,750ドル、授業料が1,200ドル、合計3,950ドル。これに対して支出としては、教師の俸給が2,400ドル (1,200ドル×2人)、借家の家賃550ドル (1897年9月1日まで)、印刷その他雑費の50ドル、水道光熱費・雑用費200ドル、合計3,200ドル。これに設備・備品費として、図書費80ドル、備品費290ドル、道具費50ドル、ピアノのレンタル料27.50ドルが加わって、支出全体の合計は3,727.50ドルとなっている。

授業料収入が1,200ドルになっているということは、当初の授業料は1クォーターごとに12ドルであったから、年間 (3クォーター) で延べ100人の生徒を予定していたということになる。教師の俸給は1人1,200ドル、2人で2,400ドルとなっているが、その2人の教師とはクララ・ミッチエルとキャサリン・キャンプの2人である。教師はこの2人以外に、教育学科の大学院生であるスマドレー (手工指導員) とサンダーランド嬢 (Miss Sunderland) が補助教師をしていたが、この2人の俸給については授業料免除という形で大学が負担するよう現在要請中だと、デューイはグッドスピードに書いている⁶⁾。

なお、この予算書では借家は翌年 (1897年) の9月1日まで借りるとなっているが、実際には1896年12月末のクリスマス休暇中に実験学校はロサリーコートに建つ旧サウスパーク・クラブハウスの建物を借りて、そこに再移転している。

その一方で、実験学校は当初から自前の校舎建設を計画していた。デューイは、1896年12月9日付のハーバー学長宛ての手紙で、校舎建設の資金を父母たちが自らの責任で借り受けて準備すると言っているので、大学から敷地を提供してもらえないだろうかと打診している。そして、敷地のめどがつくならば、すぐにでも建設に着手して、遅くとも2月中旬までには移転したいと書いている⁷⁾。しかし、実際には大学から敷地の提供は受けられず、実験学校は上述のようにロサリーコートに再移転している。そして、ロサリーコートへの再移転を報告した『大学広報』(1897年1月8日発行)掲載の実験学校の記事には、父母会 (Parents Association) によって「大学近辺に校舎を建てるための資金集めがもつか考慮されている」と記されており⁸⁾、父母たちによる校舎建設の資金づくりがロサリーコート移転後もひき続き取り組まれていたことがわかる。

上記の『シカゴ大学広報』(1897年1月8日発行)掲載の実験学校の記事には、ロサリーコートへの移転の費用も大学当局からはいっさい支出されず、そのために移転費用の全額は実験学校の父母会 (Parents Association) が組織した設備充実のための委員会をとおして賄われたと記されている⁹⁾。

ロサリーコートに移転して半年が経過した1897年7月16日付のフランク・マニー宛ての手紙で、デューイは次年度 (1897－98年度) に向けて実験学校は今のところ3,500ドルの寄付金が約束されており、そのうち2,500ドルはリン夫人からで、残りはたぶん彼女を通じてクレーン夫人とレイヤーソン氏 (Mr. Ryerson) からになるだろうと書いている。しかし、「さらなる寄付金が得られ

なければ、次年度に計画していることをすべて実行することはできなくなる」と、あいかわらずの資金不足を嘆いてる¹⁰⁾。ここでデューイが言っている次年度（1897－98年度）の計画については次節で見る。

1897年11月8日付のハーバー学長宛ての手紙で、デューイは実験学校の音楽教育への支援として、キャロライン・キャッスル嬢（Miss Caroline Castle）から200ドル、J.W.ブルックス氏（Mr. John W. Brooks）から25ドルの寄付があったことを報告し、絵画と彫刻の購入のためにG.H.ミード夫人から100ドルの寄付があったことを報告している¹¹⁾。なお、実験学校では当初からピアノをレンタルして使用しており、音楽教育に関してはシカゴ音楽学校（Chicago Conservatory of Music）のピアノ教師でアメリカ音楽教育の先駆者ともなったカルヴィン・ケディ（Calvin B. Cady）教授の音楽理論に基づいて、彼の弟子であるホワイティング嬢（Miss Whiting）とテイラーヌ（Miss Taylor）の二人が非常勤で授業を担当していた¹²⁾。

さらに同じ頃、クレーン夫人からは、自分の息子にフランス語の個人レッスンを受けさせる代わりに、今年度（1897－98年度）毎月20ドルを実験学校のフランス語授業の費用として寄付するという申し出があった¹³⁾。ちなみに、実験学校では既にこの年の5月から初步的なフランス語のレッスンを始めている¹⁴⁾。そして、1897年－98年度からはフランス語担当の専任教師としてロナリー・ッシュルマニー（Lonery A. Ashelemany）が採用されている。

3. 教育学科の整備拡充

デューイは、1897年12月6日付でハーバー学長宛てに、教育学科の将来構想についての自分の意見を書き送っている¹⁵⁾。

既にデューイは1897年1月8日付でハーバー学長に宛てて「教育学科整備拡充案」と題するレポート¹⁶⁾を提出しており、その際、前年の9月に『大学広報』に寄稿した「大学の学問としての教育学」と題する自分の論文¹⁷⁾も一緒にハーバー学長に送付していた。これらにおいてデューイは、大学における教育学科の役割は、師範学校の教員養成とは異なり、教育専門職（教育長や指導主事など）の養成と教育理論の科学的研究にあると主張したうえで、教育学の取り組むべき研究諸領域（それは同時に教育学科の組織案でもある）の概要を説明している。これに関する詳しい考察は既に別稿においておこなった¹⁸⁾。

1897年1月8日付の「教育学科整備拡充案」はハーバー学長自身の求めに応じて書かれたものであったが、1897年12月6日付の意見書はその後の教育学科の実際の活動状況をふまえて、より具体的に組織上の改善策を論じたものである。その内容は大きく分けて2つある。一つは、教育学科と附属小学校（実験学校）の関係をより緊密にすること、もう一つは、大学における中等教員養成の体制充実の一環として、教育学科の規模を拡大することである。

(1)まず前者についてであるが、これまで附属小学校は教育学科から直接指導・監督を受ける状況になかったとデューイは述べている。その理由は、附属小学校では前例のない教育のやり方を試みる必要上、かえって外部からの干渉は受けないほうが好ましかったからである。しかし開校以来ほぼまる2年が経過し、「〔附属小学校の〕事業の選択と調整に関する主要な諸問題は解決された。」したがって、附属小学校がそれ自体の体制を整えることに専念する時期は「今や終了し、または今年度の終了をもって終わる。」デューイはこう述べたうえで、附属小学校はこれからは大学の教育学教育のために積極的な役割を果たすべきであり、そのためには大学と附属小学校の橋渡し役を勤める人材がぜひとも必要だと論じている¹⁹⁾。

具体的には次のような仕事を担当することが想定されている。①附属小学校の実践をふまえて、大学で初等教育の方法と内容に関する授業を担当する。②附属小学校での実習を指導し、大学院生の補助教師を監督する。③附属小学校の実践記録などの資料を管理し、それを逐次公刊する仕事をおこなう。④大学の公開講座や婦人クラブなどで講話をし、附属小学校を現職教員や一般市民と結びつける仕事をする²⁰⁾。

既にデューイは、1897年1月8日付の「教育学科整備拡充案」においても、附属小学校に「校長」が必要だと主張していたが、その「校長」は単なる学校管理者というものではなく、ここでは“a supervising principal”と表現されており、つまりは指導主事(supervisor)としての役割を果たす校長を意味していた。デューイがここで特にその「校長」に期待した職務は、附属小学校で補助教師を勤める大学院生の指導・監督である。つまりは、上記の②の仕事である。しかも、その大学院生は大部分が現職教員であって、デューイは彼らに大学で教育の理論研究に従事させる一方で、附属小学校で補助教師として実践訓練をも受けさせようと考えていたわけである。その背景には、既にデューイのもとに、シカゴ大学附属小学校が試みている教育方法について実地に学びたいという現職教員からの申込みが来ていたからである²¹⁾。

ここには、大学における教育学科の役割を、初学者を対象とする師範学校の教員養成とははっきり区別して、既に師範学校を卒業している現職教員を対象に、教育理論の科学的研究と高度な教育専門職養成をおこなうことに求めようとするデューイの教育学科構想が色濃く反映している。附属小学校はそのための不可欠な研究施設、つまりはラボラトリーとなるべきであって、そのためには実践と理論の双方に通じた「指導主事的校長」が是非とも必要だというわけであろう。

上記の①と③と④の職務は、1897年1月8日付の「教育学科整備拡充案」を書いて以降のほぼ1年間の経過をふまえて新たに考えられたものである。①の仕事は、②の仕事とかなり連動しているし、その発展と見ることもできよう。④の仕事は、附属小学校の「指導主事的校長」として、新教育に関心のある現職教員や一般市民に向けた教育活動をおこない、あわせて附属小学校の実践に対する理解と協力(特に寄付)を求めるということであろう。そして、③の仕事はやや特殊な印象を受けるが、デューイは附属小学校の実践の成果を広く教育界全般の利用に供するための仕事と位置づけており、単に授業実践のノウハウに通じているだけでなく、それらを理論的に体系化して説明

できる高い能力が必要だと見ていた。

これらを見ると、結局、デューイは教育学科の研究施設（ラボラトリー）としての附属小学校の「指導主事的校長」には、授業の実践者として能力の高い人物よりも、実践経験をある程度もちながらも、基本的には教育実践の理論研究に携われる者を充てようとしていたことがわかる。つまり、学校の教師（授業実践者）と大学の研究者との間に位置する実践的教育研究者を求めていたのである。

これに関連して、デューイは自分が附属小学校と教育学科の橋渡し役になることは問題外だと述べている。たぶん、彼にそうすることを期待する向きが、ハーパー学長ないしは大学当局にあったのであろう。デューイは「私の任務は、附属小学校の教育内容の選択の監修（supervision）とその正しい相関を保障すること、そして大学においてそれらに関する哲学または一般理論を提示することである」と述べている。

(2)デューイの意見書の第2点目は、大学として中等教員養成の体制を強化するために、教育学科と他の諸学科との関係をどうするかという問題に関連している。シカゴ大学ではかなりの数の学生がハイスクールやアカデミーなどの中等学校の教員をめざしているが、その場合、学生たちは各学科ごとに専門教科の訓練を受けるだけで、教育学や心理学の訓練は特に受けてはいなかった。これでは中等教員養成としては不十分なことは明らかで、何らかの改善が求められていた。デューイは意見書の中で「それぞれの専門教科に加えて、教育方法という観点から、また中等学校という観点から、新たなコースを編成すること」を提案している。その内容は、今日わが国で言うところの教科教育学の内容に近い。そして、シカゴ大学と提携関係にあるアカデミーやハイスクールにおいて、実践的な教材開発や教授方法の訓練を受けさせることを提案している。そして、このような方面的な教職教育については教育学科のメンバーが担当し、各学科ではそれぞれの専門教科の内容を扱うという具合に、教育学科と他の諸学科の間に分業体制を取ること提案している。そして、そのためには、現在の教育学科の規模を拡大する必要があると訴えている。

以上のデューイの教育学科構想に対して、ハーパー学長は1897年12月23日デューイ宛の手紙で、次のような提案を示した。

私は、現在の教育学科を廃止して、新しいより大きな学科に編入する案を支持したいと考えている。もちろん、あなたはそこの長（head）に留まつてもらう。この案のほうがよいとは思いませんか²²⁾。

4. 1897-1898年度と1898-1899年度の実験学校をめぐる経過

教科課程開発：1897-1898年度

デューイは、1898年2月27日付のフランク・マニー宛ての手紙で、実験学校は「内部的にはすべて順調にいっている」と書いている。そして、教師たちの分業体制が確立し、「いまや6年間の教科課程（course of study）の開発に取り組んでいる」と書いている²³⁾。先に前年の12月6日付でデューイがハーパー学長に出した意見書でも、実験学校の内部の組織体制を整える段階は終了しつつあり、いまや実験学校は大学の教育学研究への貢献という本来の任務を果たすべき段階にあると述べられていた²⁴⁾。開校からまる2年が経過し、実験学校はいよいよ本格的に教科課程開発の研究に取り組みはじめたわけである。

実験学校の組織が整ったのは、1897-98年度の秋学期中と見てよいだろう。『大学広報』の1897年12月17日号には、実験学校の概要を説明した報告が掲載されている。それを見ると、教師スタッフは常勤が8名で、大学院生によるアシスタントが5名、生徒数は60人となっている。8名の常勤の教師にはそれぞれ担当教科が記載されており、しかもディレクターとインストラクターという役職の違いも明記され、教師間に分業体制が敷かれたことを示している。そして、歴史科のディレクターであるジョージア・ベーコン（Miss Georgia A. Bacom）が校長職を担当している²⁵⁾。

教科課程開発の様子は、シカゴ大学の『大学広報』に掲載された1897-98年度の実験学校の一連の授業実践報告からうかがい知ることができる。1897-98年度の実践報告は、11月中旬から翌年6月中旬まで、合わせて10本掲載されている。これを通覧してわかることは、教科課程開発の中でも特に「社会的オキュペーション」にはじまって「原始時代の産業と発明」「ギリシア・ローマ史」「アメリカ史」へと展開していく一連の歴史カリキュラムが開発が中心だったこと、そして理科や家庭科などの他の教科のカリキュラムも含めて、子どもの発達段階を考慮した教科内容の選択・配列および指導計画の策定が、教科課程開発の中心的な研究テーマだったことである²⁶⁾。

財政問題

先に見たように実験学校は開設当初から深刻な財政問題に直面していたが、3年目の1898-99年度になると財政問題はいっそう深刻となる。上で見たように、1897-98年度になって実験学校はようやく組織体制を整え、本格的な教科課程開発に取り組み始めたのであるが、皮肉なことに実験学校が教育学の実験室として本来の役割を果たそうとすればするほど、実は財政難が大きな障害となって立ちはだかることになったのである。デューイは、ハーパー学長に対して実験学校は大学の正規の研究施設であるから、これを維持する経費は大学が責任をもって保障すべきであると強く申し入れる。しかし、ハーパー学長は大学自体の財政難と、理事会が実験学校を認知しないことを理由に、実験学校への大学予算の支出を認めなかった。デューイは、こうしたハーパー学長と理事会の態度に次第に失望を感じるようになり、ついには実験学校の閉鎖もやむをえない口にするよう

になっている。

デューイは1898年6月23日付でハーパー学長に1898-99年度の実験学校の予算書を提出したが、それに付した手紙²⁷⁾で彼は、ハーパー学長から提案のあった授業料の値上げを受け入れ、次年度（1898-99年度）から実施することにしたと返答している。だが同時に彼は、それでもって財政事情が好転するとは思えないとも述べている。その理由として、今年度（1897-98年度）は父母への寄付依頼によって500ドル集まったが、授業料を値上げすれば、そうした寄付依頼はおこなえなくなり、その結果500ドルの収入減となること、また、授業料値上げのために子どもを学校によこせなくなる一部の父母に対しては、これまでの授業料のままで子どもを学校によこしてくれるよう措置するのがフェアであろうし、われわれとしても子どもたちを継続して教育できるほうが研究上有益だから、こうした子どもたちの授業料は値上げできないこと、さらに、学校の移転〔エリス街への移転〕と授業料の値上げのために、何人かの子どもは学校をやめるだろうから、そのぶんも収入減となることをあげている。

ハーパー学長は実験学校の財政改善のため、授業料値上げとともに、1クラス当たりの児童数を増やすことも提案していたが、これについてはデューイは断固として拒絶している²⁸⁾。その理由は、クラス規模は教育の原理に関わる問題であって、単に収入増をもたらすからクラス規模を拡大するというのでは、実験学校としての存在意義そのものを失わせることになるからというものであった。つまり、原理を曲げて実利を優先するくらいなら、実験学校として存在する意味がないというわけである。

デューイは、次年度（1898-99年度）に向けて、新たに描画（drawing）と歴史の教師が必要だと述べている。描画については、週3日午前に授業を担当する常勤の教師を一人採用したいとしており、実際にリリアン・カッシュマン（Lillian Cushman）が芸術（Art Work）担当として採用されている²⁹⁾。

歴史については、既に前年度（1897-98年度）からジョージア・ベーコンが校長職と兼務で担当していたが、これに加えて歴史教材の研究開発と実践記録の出版を担当する歴史専任の教師の採用をデューイは求めている。おそらく、前年度（1897-98年度）にはじまった教科課程開発の研究の中で、特に歴史カリキュラムの開発が中心的となり、研究体制を強化するためにも、歴史の教材開発を専門に担当する教師が必要になったのであろう。実際にデューイは次のように説明している。

私たちはこれまで、歴史に関する教育について監督（supervision）をおこない、歴史教材や資料を見つけて収集し、実践の記録をとり、それらの出版をおこなう仕事に携わる人をもたないでやってきました。私の知るかぎりでは、わが国には私たちが今おこなっているような公立学校で使えるきわめて価値ある歴史教材を開発している学校は一つもありません。現在、まさに上述したような人材の欠如のゆえに、私たちのこの研究から教育界は大きな利益を得られないでおりますし、私たちも利益を得られないでいるのです。この問題に手当てるためには、あと600ドルの追加支出が必要です³⁰⁾。

実際に歴史の専任教師としてローラ・ラニヤン (Laura Louise Runyon) が採用されたようである³¹⁾。

デューイは、こうした次年度（1898－99年度）の教員増は実験学校が当初から抱いていた事業計画を実現するためのものであって、それを実現できなければ事実上事業の後退を招くことになると述べている。そして、実験学校は無駄な経費をいっさい使っておらず、「最も理にかなった経済的な仕方で運営されており」、もしこれ以上経費を節約するとなれば「実験学校の全面的な放棄」を考えなければならないになると、ハーパー学長に警告している³²⁾。

1898－99年度の経費に関して、デューイは前年同様にリン夫人 (Nellie B. Linn) に寄付の依頼をしている。1898年7月29日付のデューイ宛の手紙で、リン夫人は附属小学校の新しい建物〔エリス街の邸宅を賃借〕への移転にともなう費用としてデューイから依頼のあった700ドルの寄付に応じている。そして、新年度が開始する10月1日までにはさらに2,300ドルを寄付すると表明し、バートレット夫人 (Abby L. Hitchcock Bartlett) も500ドルの寄付を申し出ているから、寄付は合計で昨年と同額の3,500ドルになるだろうと伝えている³³⁾。

1899年3月6日付のハーパー学長宛の手紙で、デューイはエドワード・バトラー氏 (Edward B. Butler) から200ドルの寄付があったことを知らせている。そして、大学当局が附属小学校の運営資金を出さず、附属小学校の運営をもっぱら外部からの寄付に依存していることにバトラー氏は疑義を呈しており、自分のところには他の寄付者からもこの種の質問がしばしば寄せられ、少々うんざりしていると述べている。そして、ロックフェラー氏が大学への拠出金を2倍にするという話しを聞いたが、それならその一部を附属小学校の資金に充てるのは当然でないかと訴えている³⁴⁾。

デューイのこの訴えに対して、ハーパー学長はただちにデューイに返事の手紙を出している。その中で、ハーパー学長は「もし理事たちが寄付者の側にこうした感情があるという事実を知ったならば、彼らは附属小学校をただちに解散すべきだと言うに違いない」と書いてきた。この一種の脅かしともとれるハーパー学長の言葉に、デューイは心底から怒りをあらわにした手紙を書いている³⁵⁾。

多額の寄付を継続しておこなうことで附属小学校への興味を明示してきた人たちの側に不快な感情があるからといって、理事会が附属小学校を放棄しようとするならば、それは附属小学校全般に対して理事会がほとんど共感をもっていないことを示しているように思います。もし（附属小学校の維持のために財政を支援することが一時的にできないということとはまったく別に）附属小学校があなた自身と理事会の積極的な共感と関心を得られないのであれば、そしてもし附属小学校が大学本体の有機的・部分となろうとするときに、彼ら理事者たちが良好な財政状態を保障してくれないのであるならば、私としてはあなたから附属小学校をただちに解散すると御提案いただき、それにただちに同意します。附属小学校の支出は少なくとも4年間は増大し続けます。附属小学校と大学全体との間に存在する関係について、より明確な理解を確立すべきときがきたと思います——これは、単に理事会が財政的に何をなしうるかということに関係するだけでなく、彼らの現在および将来の態度全体に関係しています³⁶⁾。

この手紙で、デューイは附属小学校の事業に対するハーパー学長と理事会の態度に不信感をあら

わにしている。そして、附属小学校に対する大学当局の理解と支援が得られないのであれば、附属小学校の解散も辞さないという強い態度を示している。

しかし、大学当局の態度はいっこうに改善されなかった。デューイは1899年4月下旬から11月中旬まで半年余りにわたってカルフォルニアとハワイに講演旅行に出かけている³⁷⁾。その間の1899年5月31日付で、シカゴ大学の有志が附属小学校を支援するために意見書をハーパー学長宛てに提出している³⁸⁾。

この意見書では、附属小学校は大学組織の有機的な一部分と見なされるべきこと、デューイ教授の教育理論は国内においても海外においても広く注目されるようになっており、附属小学校を大学の正規の機関に位置づけることは、シカゴ大学が独創的な教育研究のセンターとしての名声を高めることになるといった趣旨のことが述べられている。そして、附属小学校への財政支援の必要性を訴えるなかで、今年度（1898-99年度）には600ドルから700ドルの赤字が避けられないと述べ、こうした赤字はこれまでデューイ教授個人の努力によって寄付を募り何とかのりきってきたけれども、教育実験の成果が実証されるに至った段階においても、なおこうしたやり方を続けることは理不尽だと訴えている。

デューイがハーパー学長に提出した1898-99年度の附属小学校の活動報告には、支出総額は12,870.26ドル、支出の主な項目は教師の俸給で9,160ドルと記載されている。そして、この支出項目は教材の研究・開発に携わることができる優秀な教師を確保するために年々増加する傾向にあると述べられている。報告では、教師は13人で、平均給与は一人700ドルにすぎず、彼らの多くは附属小学校の教育実験に多大な関心をもっているがゆえに少額の給与に甘んじており、彼らの献身に応えるためにも近い将来俸給額の増加は避けられないと述べている³⁹⁾。

他方、ハーパー学長は1899年8月15日付のE.A.ターナー（Edwin Arthur Turner）宛ての手紙⁴⁰⁾で、この3年間で附属小学校は1,200ドルの赤字を出したが、成し遂げられた成果から見ればこれは取るに足りない額だと述べ、個人的には附属小学校の事業に積極的な関心をもっていることを表明している。その証に、彼は附属小学校の赤字に対して自分のポケットマネーから100ドルを寄付するつもりだと述べている。しかしながら、大学の経営を預かる学長として、彼は理事会の意向を無視することはできず、苦しい胸のうちを明かしている。

理事会は附属小学校の資金に責任をもつことは、いまのところ不可能だと見ていています。その理由は、附属小学校が設立される以前に、大学は使えるお金のすべてを他の事業に費やしていたからです。ここ3~4年、われわれは新しい事業に文字どおりまったく着手できないでいるあります。それゆえに、附属小学校の赤字が解消されるまでは、附属小学校を継続するわけにはいかないのです。次年度〔1899-1900年度〕の附属小学校の必要経費は保障されており、われわれが過去の負債を解消できれば、理事会はすみやかに次年度の附属小学校の予算を通すでしょう⁴¹⁾。

ハーパー学長は手紙の最後に「シカゴとイリノイ州ばかりかアメリカ全体にとってもこの附属小学校以外に公教育制度に大きな期待ができるものは他に何もなく、この学校は結局のところ実験室

なのです」と書いている。ハーパー学長は個人的には附属小学校の存在意義を充分に理解しながら、それならどうして大学としてきちんとした予算措置をとらないのかと迫るデューイと学内有志の人々に対して、彼は大学の資金にまったく余裕がないことを理由にあげ、赤字が解消しないかぎり理事会が附属小学校の次年度の予算を認めないと迫るから自分としては如何ともしがたいと応えているのである。デューイと学内有志の人々にしてみれば、理事会に働きかけて附属小学校に対する予算措置を講ずるよう説得するのが学長としての責務だろうと考えているのに対して、ハーパー学長は逆に理事会の意向を盾に動こうとはせず、学長としてきわめて不誠実な態度だと彼らには映っていたのである。デューイとハーパー学長との関係はどうやらこのあたりからぎくしゃくはじめたようである。

就学前部門の開設

実験学校は1898年10月の秋学期からエリス街5412番地（5412, Ellis Ave.）に建つ古い邸宅に移転した⁴²⁾。そして、エリス街への移転を機に、新たに4～5歳児を対象とする就学前部門（sub-primary department）を開設することになった。デューイは当初から実験学校の中に就学前教育の段階を含ませることを考えていたが、資金不足のため実現できなかった⁴³⁾。しかし、この年、ハワイのキャッスル家（Castle Family）から1,000ドルの大口寄付を得て実現にこぎつけたのである。

そのいきさつについては、1898年8月16日付および9月1日付の2回にわたってデューイがクック郡師範学校のフローラ・クック嬢（Miss Flora J. Cooke）宛てて書いた手紙に詳しい⁴⁴⁾。キャッスル家はハワイの資産家で、G.H.ミードの妻ヘレン（Helen Kingsbury Castle Mead）の実家であり、ヘレンの兄henry・キャッスル（Henry Northrop Castle）とG.H.ミードはオバーリン・カレッジの学生時代からの親友であった。そのhenry・キャッスルは1895年に客船エルベ号の沈没事故で娘のドロシー（Dorothy Castle）とともに亡くなっている。キャスル家はこの二人を記念して、ホノルルに幼稚園を設立することにし、1899年秋の開園を予定していた。そして、その準備のために、デューイの実験学校に4～5歳児向けの幼児教育のクラスを設け、だれか優秀な教師を見つけて、そこで一年間幼児教育の訓練をおこなったうえで、ホノルルに派遣してくれるよう依頼してきたのである。そして、デューイは実際にこの仕事を担当するにふさわしい人物としてフローラ・クック嬢に白羽の矢をたて、ハワイに行って現地を視察するとともに、10月の秋学期から開設される実験学校の就学前部門の教師を引き受けてくれるよう依頼したのである。

この話しにフローラ・クック嬢はだいぶ迷ったようである。特に、クック郡師範学校のフラン시스・パーカーのもとを離れることに彼女は躊躇を感じていたようである。デューイは、この件で直接パーカーには相談していなかったが、もしクック嬢がハワイで幼児教育の仕事をするこになれば、それはパーカーの思想を現地の教育界に広く浸透させることになるから、むしろパーカーにとっても好機になるだろうとクック嬢を説得している⁴⁵⁾。

さらに、デューイ夫人のアリスも9月16日付でクック嬢に手紙を出して説得にあたっている。その中でアリスは、ミード夫人のヘレンとその妹のコールマン夫人がクック嬢に大いに期待していること、自分の娘のエヴリンと息子のフレデリックもクック嬢が実験学校に来てくれることを喜んでいること、そして「新教育を実地にテストするために、まだ話すことができない私の2歳4ヵ月の息子〔ゴードン〕を預けたいと思います」と書いている。そして、「私たちは、パーカー大佐がハワイ諸島の未来の教育全体を方向づけ、その実際の意味を認識するようになることを夢見ています」と書いている⁴⁶⁾。

こうしたデューイ夫妻の説得にもかかわらず、クック嬢は断りの返事をしてきた。彼女は自分の代わりに、シカゴ・フレーベル協会で幼稚園教員養成に携わっていたバーサ・ペイン嬢 (Miss Bertha Payne) という人を紹介してきたが、デューイは幼稚園教育よりもむしろ初等教育の経験をもつ人物のほうが望ましいと考え、ペイン嬢は採用しなかった⁴⁷⁾。デューイはフレーベル主義の幼稚園にあくまで懐疑的だったようだ。

実際に採用されたのは、フローレンス・ラ・ヴィクトール (Florence La Victoire) という若い女性であった。彼女は1898-99年度の1年間実験学校で就学前部門を担当したあと、翌年（1899年）にハワイに赴任しており、デューイは1899年9月にホノルルで彼女に再会している⁴⁸⁾。しかし、彼女は芳しい成果が得られないことを理由に、翌年（1900年）6月いっぱいホノルルの幼稚園を辞職している⁴⁹⁾。

中等教員養成

先にデューイが1897年12月6日付でハーパー学長宛てに提出した教育学科の将来構想に関する意見書で、デューイは中等教員養成の体制を抜本的に整備する必要を訴えていた⁵⁰⁾。しかし、教育学科の中等教員養成の体制はなかなか整備されなかったようである。コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのジェームズ・ラッセル (James Earl Russell) からの中等教員養成に関する問い合わせに答えた1899年1月6日付の手紙で、デューイは「われわれのところでは、中等学校教員向けの必修の科目は開設していません」と書いている。そして、モーガン・パーク・アカデミーの校長であるチャールズ・サーバー (Charles H. Thurber) が非常勤の准教授として中等教育に関連した授業科目を担当しているが、必修になっておらず、個人的には中等教育を扱う必修科目の設置が必要だと考えていると書いている。そのうえでデューイは、次年度（1899-1900年度）に1,500ドルの年報で教育学科に専任講師 (instructor) を一人採用できそうだが、中等教育を専門に担当できる適当な人物がいればぜひ紹介して欲しいとラッセルに求め、サンフランシスコ州立師範学校のフレデリック・パーク (Frederic Lister Burk) はどうだろうかとラッセルに意見を求めている⁵¹⁾。

デューイからのこの問い合わせに、ラッセルは1月23日付の手紙で、自分もこの1年以上ものあいだ、中等学校の教員養成を担当できる人物を探してきたが、そういう人物はきわめてまれだとい

うことを知ったと答えている。そして、フレデリック・パークについても自分はいろいろ検討してみたが、ティーチャーズ・カレッジの教授陣に加えるほど有能な人物ではなかったと回答している。そのうえでラッセルは、自分がシカゴに推薦できそうな人物（たぶん大学院生）がティーチャーズ・カレッジには今年6人から8人くらいいるので、詳細な採用条件を知らせ欲しいと書いている⁵²⁾。

ところで、デューイはコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジについて、1899年7月26日付のフランク・マニー宛ての手紙で次のように書いている。

ニューヨークのティーチャーズ・カレッジは急速に発展しており、進歩的な仕事をしているが、保守的な線に沿っている。……優秀な学生を集めるために昨年組織改革をおこなったが、それ以前はあまりよくなかった。私は大学院のことを言っているのだが、それは変わりつつあると見ていいだろう。ジェームズ・ラッセルとフランク・マクマリーを擁し、コロンビア大学本体と密接な結びつきをもっているから、必ずや変わるだろう⁵³⁾。

デューイは、ニューヨークのティーチャーズ・カレッジが自分たちの教育学科の強力なライバルになりつつあると見ているようである。

それはさておき、デューイが実際に教育学科の専任講師 (Instructor in Pedagogy) に採用したのは、ジョージ・ハバート・ロック (George Herbert Locke) であった⁵⁴⁾。彼は、1896年にデューイのもとで哲学・教育学の研究員 (fellow) となり、1897年に教育史の講師 (lecturer) としてハーバードに転出したが、デューイは前々から彼をシカゴに連れ戻したいと希望していた。例えば、1897年4月28日付のハーパー学長宛ての手紙で、デューイはロックの能力を高く評価し、彼をハーバードに取られるのは惜しいので、彼をハーバードと同じ条件でシカゴに引き止めることはできないかとハーパー学長に訴えている⁵⁵⁾。さらに、1897年12月6日付のハーパー学長宛ての意見書で、デューイは大学と附属小学校の橋渡し役を勤める人物がぜひとも必要だと述べた際に、3番目の候補者としてロックの名をあげ、彼をハーバードから連れ戻すことを提案している。そして、次のように書いている。

ロック君を再びここに連れ戻すことができればよいと考えています。彼はハーバードで1年間、教育と組織運営について経験を積んでくることでしょうから、学校の運営と組織面に関する諸科目を担当するのにふさわしいでしょう。また、近在のいろいろな学校を訪問し、教育実習の望ましいやり方を発見する仕事を担当すること、サーバー氏を補佐してハイスクールでの実習生の面倒をみるとこと、サウスサイド・アカデミーが大学附属の中等学校に発展解消されたときには大学とサウスサイド・アカデミーの教育学上の利害を調停すること、そして他学科との間に人脈をつくり教育学における諸学科間協力をとりつけること——これは机上で正しく計画されても、実際にそのとおりにいかないことが多いので、かなりの時間と注意を必要とします——こうした仕事も彼はりっぱにやることでしょう。もし彼に戻ってくるつもりがあれば、1,200ドル程度でも彼は戻ってくると思います⁵⁶⁾。

以上の文面から、デューイがロックに教育学の専任講師としてどのような役割と仕事を期待して

いたかがよくわかる。1899–1900年度の秋学期からロックを教育学科のスタッフに加えたことで、デューイは2年ごしでようやく中等教員養成に本格的に取り組む体制を整えたのである⁵⁷⁾。

シカゴ学院の構想

デューイは、1899年の4月下旬から11月中旬までの半年あまりにわたって、カリフォルニアとハイに講演旅行に出かけている⁵⁸⁾。その間の6月、シカゴではフランシス・パーカーが市教育委員会との数年来の対立から、ついにシカゴ市師範学校 (Chicago City Normal School, これは1896年1月にシカゴ市に移管された旧クック郡師範学校である) を辞職するに至っている。実は、パーカーおよび彼とともにシカゴ市師範学校を辞職したほとんどの教授陣は、パーカーの支持者で資産家であるブレイン夫人 (Anita McCormick Blaine) が彼のために100万ドルを拠出して設立するシカゴ学院 (Chicago Institute) にそのまま移り、そこでパーカー自身の考えに基づく教員養成を思う存分おこなうことになっていた⁵⁹⁾。

ブレイン夫人は、既に1899年4月はじめにはシカゴ学院の構想を固めていたようである⁶⁰⁾。デューイは1899年4月下旬にはシカゴをあとにしてカリフォルニアに旅立っていたが、4月26日付でカリフォルニア州サンタバーバラからジェーン・アダムズ宛てた手紙の中で、このシカゴ学院の構想について自分の意見を述べている⁶¹⁾。すなわち、シカゴを出発する直前、彼はハーパー学長に面会し、そのときの印象では、ハーパー学長はブレイン夫人が計画している教員養成学校そのものに関心はなく、むしろシカゴ学院が市の北部に設立されれば、市北部の生徒たちをそこでカレッジ2年生段階まで教育してもらって、その後シカゴ大学に接続するアカデミック・スクールとなることをハーパーはシカゴ学院に期待しているようだと書いている。シカゴ大学のある市南部には既に1896年設立のルイス学院 (Lewis Institute) があり、そこでは進学準備教育にプラスして2年間のカレッジ教育を提供し、そこからシカゴ大学のシニア・カレッジ (3・4年次課程) に接続するようになっていたが、同様の学校を市の北部にも確保することをハーパーはもくろんでいたのであろう。そのため、デューイ自身は、シカゴ学院が自分の実験学校および教育学科と関わりをもつことにはならないだろうと見ている。しかし「いつか最大の焦点となるかもしれないが、わたしは巻き込まれたくない」とも付け加えている。皮肉なことに、デューイのこの懸念は2年後に現実となる。

1899年7月26日付でフランク・マニーに宛てた手紙でも、デューイはシカゴ学院について触れている。ここでデューイはブレイン夫人が計画している教員養成学院のことを「ティーチャーズ・カレッジ」と呼んでおり、それはシカゴ大学の教育学科とは特別な関係をもたないと書いている。そして、それは教員養成という意味での教育大学 (a teachers college) であるのに対して、自分の教育学科はむしろ現職の教員が大学院レベルの学位を求めて勉学するところだと述べている⁶²⁾。ここでもデューイは、ユニバーシティ (研究大学) の教育学科は、師範学校の教員養成とは異なって、現職教員向けの高度な専門教育を目的にしていることを強調しており、そうした考えにたって、彼

はブレイン夫人とパーカーのシカゴ学院からはできるだけ距離をとりたいという気持ちを率直に表明しているのである。

5.『学校と社会』と『小学校記録』の出版

『学校と社会』

デューイが半年間にわたるカリフォルニアとハワイへの講演旅行からシカゴに戻ったのは、1899年の10月15日である⁶³⁾。1899-1900年度の秋学期（Autumn Quater）は既に始まっていた。

デューイは11月1日付でブレイン夫人に宛てて『学校と社会』(*The School and Society*)の出版援助に対する礼状を出している。その中で彼は、自分がシカゴに戻ってくるのが予定よりも遅れたうえに、本の献呈と一緒に礼状を出すつもりでいたが、出版が一日延ばしに遅れていて、もう待てなくなったので、遅まきながらお礼の手紙を書くことにしたと述べている⁶⁴⁾。

『学校と社会』は、デューイが4月にカリフォルニアに出発する直前に実験学校の父母や支援者たちを集めておこなった三連続講演の速記録と、彼がその2ヵ月前の2月に実験学校の父母会(Parents' Association)で「大学附属小学校の三年間」(Three Years of University Elementary School)と題しておこなった講演の速記録とを合わせて印刷したものである。会話体の速記録にデューイ自身が若干の修正を施し、彼の留守中にG.H.ミード夫妻がそれに丹念に目を通して、読みやすい文章になるように細部の修正をおこなった。

1899年11月10日発行の『シカゴ大学広報』に『学校と社会』の出版を知らせる記事と、シカゴ大学出版からの広告が出ているので、本が実際に出来上がったのはデューイがブレイン夫人に礼状を書いてから1週間ほど後だったようだ⁶⁵⁾。第1刷は1,000部発行され、費用の510ドルはブレイン夫人が負担した⁶⁶⁾。そして、本の売り上げから約350ドルほどが著者のデューイに支払われ、全額実験学校の活動資金に充てられた⁶⁷⁾。

ひきつづいて翌年(1900年)2月下旬に第2刷が1,500部発行され、3月末までに1,000部ほどを売り上げた⁶⁸⁾。しかし、第2刷の出版費用が割高になったことについて、デューイはシカゴ大学出版に不満を抱くようになり⁶⁹⁾、第3刷では出版社を変更することも選択肢として考えるようになった⁷⁰⁾。さらに、シカゴ大学出版の主任(Director)ニューマン・ミラーから、第3刷では新しくプレート版を組むので出版費用が当初の見積りよりも高くなることを知らされ⁷¹⁾、しかもシカゴ大学出版が第3刷の出版作業になかなか着手しなかったこともあるって、デューイはマックルラー・フィリップス社(McClure Phillips & Company)という別の出版社と版権契約の交渉を始めた。ちなみに、デューイとシカゴ大学出版との間には正式な版権契約はなく、デューイは1冊75セントの売り値に対して1冊あたり45セントを受け取ることになっていた。

ニューマン・ミラーは、デューイがマックルラー・フィリップス社と版権契約を結ぼうとしてい

ることに対して丁重な言い回しで抗議した⁷²⁾。それに対してデューイはただちに反論し、自分がシカゴ大学出版との間に正式契約がないことをいいことに出版社を変更しようとしていると思われるのを心外だと論じている。そして、シカゴ大学出版が第3刷の仕事に迅速に取り組んでいたなら、マックルラー・フィリップス社からの版権契約の申し出を受け入れることはなかっただろうと述べ、責任を全面的にシカゴ大学出版側に向いている⁷³⁾。

シカゴ大学出版のニューマン・ミラーは、1900年6月23日付でハーパー学長に手紙を書き、「学校と社会」の出版をめぐるこれまでの一連の経過を報告し、あわせて自分の立場を説明している⁷⁴⁾。この中でミラーは、第1刷1,000部の出版費用510ドルは全額ブレイン夫人が負担し、うち275冊は無償で献本され、残りの725冊に対して1冊あたり45セント、総額で326.25ドルがデューイに支払われたこと、第2刷1,500部については、88冊が無償で献本され、残りの1,412冊に対して1冊あたり45セント、総額で635.40ドルがデューイの取り分となるが、そこから出版費用の455.42ドルを差し引いて、残りの179.98ドルがデューイに実際に支払われる額だと説明している。そして、もしこの第2刷の出版が10%の版権料契約でおこなわれていれば、1冊75セントの1,412冊で総額1059.00ドルの売り上げに対して、その10%の105.90ドルがデューイに支払われることになったはずで、上の179.98ドルという数字はデューイが20%近い版権料を取ったことを意味すると述べている。つまり、シカゴ大学出版としてはデューイに通常の版権料以上の取り分を保障してきたのに、彼が出版費用に文句をつけ、一方的に出版社を変更したのは不当だと訴えているわけである。

さらに、第3刷の件についてニューマン・ミラーは、自分は既に4月23日付のデューイ宛ての手紙で第3刷にとりかかることを促しており⁷⁵⁾、第3刷に迅速に取り組まなかったというデューイの言い分は当たらないと述べている。そして、デューイとの間では、第3刷の出版は第2刷の売れ行き具合を見ながらゆっくり進めればよいという口頭了解があったと述べ、6月12日付のデューイの手紙を受け取るまではまさか彼が本気で出版社を変更するなどとは思いもよらなかったので、他の出版物の仕事を優先して「学校と社会」の出版を後回しにしていたのだと弁明している⁷⁶⁾。

デューイも1900年6月28日付でハーパー学長宛てに手紙を書き、シカゴ大学出版とは正式の契約を結んでいたわけではなく、「学校と社会」の出版は最初から限定された期間に限って、しかも双方いずれかの都合で終了することになっていたと述べて、マックルラー・フィリップス社との版権契約によってシカゴ大学出版を不当に扱ったというニューマン・ミラーの非難はまったく見当はずれだと訴えている⁷⁷⁾。

「学校と社会」の出版をめぐるデューイとシカゴ大学出版との間のやりとりは以上で終息している。そして、「学校と社会」第3刷は1900年7月にマックルラー・フィリップス社から5,000部発行された。その後、マックルラー・フィリップス社からは第4刷と第5刷も発行されたが、1905年7月になってデューイはシカゴ大学出版と正式な版権契約を結び、「学校と社会」は第6刷以降第11刷まで再びシカゴ大学出版から発行されるようになった。1915年にデューイは「学校と社会」の第4章「大学附属小学校の三年間」を削除して、実験学校が1900年にシカゴ大学出版から発行した

『小学校記録』(*The Elementary School Record*)に彼自身が書いた諸論文のうちから6本を選び、それらを4章から8章として掲載することで、『学校と社会』を新たに改訂版(Revised Edition)としてシカゴ大学出版から発行した。改訂版は1953年までに17刷出している。ちなみに、岩波文庫版の邦訳はこの改訂版第17刷を訳出したものである。その後1956年以降、この改訂版の『学校と社会』はデューイが1902年にシカゴ大学出版から出した『児童とカリキュラム』(*The Child and the Curriculum*)と合わせて合冊版(Combined Edition)となってシカゴ大学出版から発行され、今日に至っている⁷⁸⁾。

『小学校記録』の出版

1899-1900年度に実験学校では、それまでの3年あまりの教育実践の成果をまとめ公刊するという事業に取り組むことになった。具体的には、1900年2月から12月にかけて、9分冊の『小学校記録』(*The Elementary School Record*)がシカゴ大学出版から逐次刊行された。

デューイは、1898-99年度の実験学校の活動報告書において、「今年度の教育上の主な課題は教科課程(course of studies)に関するこれまでの3年間の諸成果を理論的に定式化することであった」と述べ、いくつかの点でまだ検討すべきことが残されているとしながらも、「全体としては、当校がとってきた基本的方向はすばらしい成果をあげていることが見出されており、この方面での実験の期間は事実上終了したように思われる」と述べている⁷⁹⁾。そして、「いまや当校は、これまでの諸成果を一般の教師たちに以前にもましてより直接に役立つような形で出版できるところまで達している」と書いている⁸⁰⁾。それが『小学校記録』全9冊シリーズの刊行であった。

それ以前にも実験学校では、毎週金曜日に発行されるシカゴ大学の『大学広報』に、実践報告を定期的に公開してきた。それらの実践報告は、1896年11月から1899年9月までのほぼ3ヵ年にわたっている。『小学校記録』全9冊シリーズは、それら過去の実践の成果を理論的に定式化して、一般の学校の教師たちにも利用できるようにとの考え方から、ほぼ各教科ごとに分冊で刊行されたのであった。各分冊のタイトルと発行年月は次のとおりである。

- No 1 : 芸術 (Art), 1900年2月
- No 2 : 音楽 (Music), 1900年3月
- No 3 : 織物 (Textile), 1900年4月
- No 4 : 植物 (Botany), 1900年5月
- No 5 : 幼稚園 (Kindergarten), 1900年6月
- No 6 : 理科 (Science), 1900年9月
- No 7 : 手工 (Manual Training), 1900年10月
- No 8 : 歴史 (History), 1900年11月
- No 9 : カリキュラム, 1900年12月

6. バルクリー准教授とヤング夫人

ジュリア・バルクリー

1899年秋学期（10月開始）から教育学科にジョージ・ハーバート・ロックが教育学の専任講師（Instructor in Pedagogy）として採用されたことは既に論じた。同じ年の夏学期（7月開始）にはエラ・フラッグ・ヤング（Ella Flagg Young）が教育学の准教授（Associate Professor of Pedagogy）として採用されている。こうしてシカゴ大学教育学科は1899–1900年度に2人の専任スタッフをあいついで獲得することになった。その一方で、シカゴ大学開学以来教育学の准教授を務めてきたジュリア・バルクリー（Julia Ellenn Bulkley）が1899–1900年度の冬学期（1900年3月終了）をもって退職している。

ジュリア・バルクリーは、デューイがシカゴ大学に着任する2年前の1892年5月に教育学准教授に任命されている。彼女は、30年の教職歴をもつベテラン教師で、シカゴに来る前はニュージャージー州プレインフィールド（Plainfield, New Jersey）のハイスクールで校長兼教員養成課程主事（supervisor）を務めていた。そのかたわら、彼女はニューヨーク州シャトーカ（Shautauqua, New York）で毎年夏開かれるサマースクールにも積極的に参加していて、そこでハーパー学長と知り合った⁸¹⁾。

バルクリーは、着任早々の1892年8月から3年間、教育学のPh. D. 取得のため、スイスおよびドイツに留学し、帰国したのは1895年9月下旬であった。デューイは、その前年の1894年7月に着任し、夏学期と秋学期を務めた後、12月中旬からヨーロッパ旅行に出かけ、翌年（1895年）6月に帰国、しばらくニューヨーク州ハリケーンの山荘や妻アリスの実家があるミシガン州フェントンに滞在した後、8月に第二子のジェーンがマラリア熱にかかり、ミシガン州バトルクリークにある療養所でジェーンの看病に付き添い、結局デューイがシカゴに戻ったのは1895年9月中旬になってからであった。こうしてデューイとバルクリーは1895年9月下旬になってはじめて、教育学科の同僚として互いに顔を合わせることになった。

シカゴ大学教育学科が正式に学科として授業を開始したのは1895年10月の秋学期からである。開講科目の大半はバルクリーが担当し、デューイは大学院課程で年間1科目ないし2科目を担当するにすぎなかった⁸²⁾。彼は、教育学の授業担当よりも、主任教授として教育学科の整備拡充を図るに力を注ぎ、とりわけ実験学校を教育学科の教育研究体制の核として発展させることに最大限の努力を傾けていた。こうした努力の中で、デューイは自分の描く教育学科構想の推進に准教授のバルクリーはまったく役立たない人物だという評価を下すようになり、しかも彼女のドイツ仕込みの講壇教育学が学生（ほとんどは現職教員の大学院生）に不人気で受講者が集まらないという現実もあり、1899–1900年度の冬学期についてデューイはバルクリーを辞職させるに至るのである。

実験学校開設をめぐるデューイとバルクリーの対立

デューイとバルクリーの関係は最初からうまくいかなかった。直接の対立は、デューイが開設準備を進めていた実験学校をめぐって生じた。1895年12月末、バルクリーは開校が間近に迫っていた実験学校についてハーパー学長に異議を申し立てた。12月28日付のハーパー学長宛の手紙の中で彼女は、この学校には「全体的な最終目的」(genaral final purpose) というものが欠けており、手当たりしだいに実験をおこなう無秩序な学校となるのは必定だと批判した。そして、このままでは「クック郡師範学校と大差ないものになるか、ミッチャエル嬢のプライベートな学校になってしまう」と訴えた⁸³⁾。バルクリーは、教育学科に付設する学校は師範学校の実習校 (practice school) のように、教授法の訓練を秩序正しくきちんとおこなう学校でなければならないと考えていた。なぜなら、彼女がドイツで学んできたヘルバート教育学では、教師教育における理論と実践の統合の要として、実習校の役割が重視されていたからである⁸⁴⁾。これに対してデューイは、そのような教員養成のための実習校はシカゴ大学のような大学院中心の研究大学にはふさわしくないと考えていた。シカゴ大学教育学科は、既にある程度の教職経験を有する現職教員を相手に、彼らに大学院レベルの高度な専門教育を施すことによって、指導主事 (supervisor) や教育長 (Superintendent) などの教育専門職を養成することをめざしており、したがってそこに付設される学校は、ハイスクールを卒業したばかりの初学者を相手とする師範学校の実習校とはまったく性格が異なり、むしろ教育理論のオリジナルな研究をおこなうための実験室となるような学校でなければならない。デューイはそのように考えていたのである。もともとたき上げのベテラン教師で、既に50歳を越えていたバルクリーには、30歳代半ばの新進気鋭の哲学者 (デューイ) が抱いていた実験学校の野心的な構想は、とうてい理解のおよぶものではなかった。

それだけに、デューイは実験学校の開設準備にあたって、バルクリーにほとんど仕事らしい仕事を割り当てなかつたようである。実は、バルクリーの実験学校に対する本当の不満は、教育学科の准教授である自分が実験学校のプロジェクトから完全に締め出され、わずかに「学校で使う椅子の選定」のような仕事を任されたにすぎなかつた点にあったようである。そして、実際に彼女は、椅子の選定など「私のやる仕事ではない」と協力を拒んだのであった。デューイは、実験学校の教師に予定していたクララ・ミッチャエルと1895年11月以降頻繁に手紙のやり取りをし、学校の基本的な教育方針から具体的な授業計画、さらには設備や備品の細目に至るまで、綿密に打ち合わせをおこなっている。こうした準備過程で、バルクリーは自分が完全に蚊帳の外に置かれたと感じ、准教授としての面子をかけてハーパー学長に訴えたのである。先のハーパー学長宛の手紙の中でバルクリーが、このままでは「ミッチャエル嬢のプライベートな学校になってしまう」という言い方をしていた点に、彼女のいらだちが示されていた。

ハーパー学長はバルクリーの手紙をデューイに転送した。驚いたデューイは、年明けの1896年1月11日付でハーパー学長に反論の手紙を書いた⁸⁵⁾。デューイはバルクリーの主張を3点に整理し、それぞれについて反論した。第1に、実験学校が明確な方針を欠いた無秩序な学校になるというバ

バルクリーの批判に対して、デューイはそのようなことにはけっしてならないと答え、むしろ実験学校は初等教育改革の完璧な実例を示すことになるだろうと論じている。たぶん、この種の批判はバルクリーに限らず、いろいろなところから寄せられていたのだろうが、デューイは少々うんざりしていたと見えて、バルクリーのこの批判にはとともに応えていない。第2に、自分は無視されているというバルクリーの言い分について、デューイははっきりと彼女には実験学校の仕事は任せられないと言っている。なぜなら、実験学校の運営には大学内外のさまざまな人たちの協力を得ることが必要で、そのためには学校経営の手腕にたけた統括責任者が是非とも必要なのが、彼女はそうした仕事には向いていない。デューイはそのように説明している。第3に、椅子の選定のような雑用を押し付けられたというバルクリーの非難に対して、デューイは、自分が大学の仕事に追われて時間がとれない中、学校の開校期日がせまってきて、そのため学校の教室探しや備品の調達などの仕事をバルクリーに依頼したけれども、彼女には断られたというのが実際のところだったと説明している。そして、通常の小学校とはまったく性格を異にする実験学校にとって、教室探しや備品の調達といった物的条件整備の仕事が学校の教育活動そのものにとってどんなに本質的な意味をもつ仕事であるのか、残念ながらバルクリーにはわかってもらえなかったと述べている。デューイは手紙の最後で、彼女の対応は「いくらか子どもじみている」と書いている。

フランク・マニーとバルクリーの対立

1896年1月に実験学校は開校する。先のハーバー学長宛の手紙の中でデューイは、実験学校の運営には統括責任者が必要だが、バルクリーはその仕事に向かないと述べていた。手紙の文面からすると、デューイは以前にもハーバー学長にそのような人物の採用を求めていたようである。3月になって、デューイはフランク・マニーとうハイスクールの教師を次年度（1896年7月から1897年6月まで）に1年間、教育学科の現職研修教員として受け入れ、彼に教育学科の助手（assistant）の身分を与えて、実験学校の仕事をしてもらうように取り計らっている。1896年4月15日付のマニー宛ての手紙で、デューイは彼に助手として依頼する職務内容を説明しながら、次のように書いている。

教育学科は、大学内の他の諸学科および学外のさまざまな学校と密接な関係をもつべきだと思っている。私は取り組むべき課題を総論的にいくつか考えているのだが、具体的な実行策となるとあいにく思いつかない。とはいえ、開始したばかりの観察学校〔実験学校〕が核となるべきであろう。大学院生の中のすぐれた専門家が〔実験学校にやってきて〕、化学、地学など、それぞれの分野の素材を使って公立学校の教材開発に取り組むようにすべきだろう。そのためには、だれかがこれらの院生のことをよく知ったうえで、教材開発の研究に興味をもたせるようにする必要がある。教育学の准教授〔バルクリー〕はドイツで研究してきた。彼女は指導主事をしていたことがあり、優秀だったらしい。彼女はドイツで教育学を習得したのだが、まあ、率直に言って、どっちつかずだ。理論的でもなければ実践的でもない。私は、大都市のユニバーシティの教育学科はどうあるべきかという問題に取り組むために、私の手助けとなる人物が欲しいのだ⁸⁶⁾。

ここに述べられているように、デューイは実験学校で大学院生の研究指導がおこなえる人物を必要としていた。それは、ただ単に自分の手助けとなる人物が必要だというのではなく、まさにユニバーシティ（研究大学）の教育学科はどうあるべきかという問題に関わっていた。彼は、ユニバーシティ（研究大学）の教育学科は師範学校とは違って、教育学を「実験室の科学」として確立すべきで、実験学校はそのための核だと位置づけていたのである。そこでは大学の各専門分野の研究成果に基づきながら、公立学校の教材開発の研究が、学校そのものを実験室にしておこなわれるのである。そして、このような教育学科と実験学校の構想を推進するうえで、バルクリーはほとんど役に立たない人物だとデューイは見なし、フランク・マニーに実験学校の指導・監督の仕事を依頼したのである。

バルクリーは1896年5月から、学位論文の出版のために再びスイスに出かけている。チューリッヒからハーパー学長に宛てた手紙⁸⁷⁾の中で、バルクリーは冬学期（1月～3月）の彼女の受講生の間に「ドイツ教育学に対する偏見」とでも言うような漠然とした傾向があったことを認めている。おそらく、ハーパー学長から彼女の授業が不評であることを指摘されていたのであろう。同じ手紙の中で彼女は、スイスに出発する前、次年度（1896～1897年度）の授業計画を主任教授のデューイに提出したときに、彼からもそのことを指摘されたと書いている。しかし、彼女は、ドイツ教育学は単にドイツ的というだけではなく普遍性をもっており、現在知られているかぎりで最良の教育学の体系だと主張している。そして、自分としては最近のさまざまな理論動向なども取り上げて比較検討をおこなっているので、必ずしもドイツ一辺倒になっているわけではないと弁明している。そのうえで、最新流行の「児童研究」(child study)について、瑣末な事実を脈絡もなくかき集めているだけで、それこそアメリカ教育学にとって嘆かわしいかぎりだと述べている。おそらく、フランシス・パーカーのクック郡師範学校やデューイの実験学校のことを念頭においての批判であろう⁸⁸⁾。

7月から9月までの夏学期の間、デューイはシカゴを不在にしていた。その間、フランク・マニーと頻繁に手紙のやり取りをし、実験学校の移転や、10月からの授業の開始に向けた準備などについて、マニーに事細かな指示を書き送っている。マニーは8月中旬にシカゴにやってきて、デューイの指示にしたがって助手の仕事を開始した。そして、8月の末にバルクリーがスイスから帰国した。おそらくは、マニーと彼女の間に最初からぎくしゃくした関係が生じ、そのことをデューイはマニーから知らされたのであろう。デューイは、1896年9月4日付でニューヨーク州ハリケーンからマニーに宛てた手紙の中で、次のように書いている。

ミス・バルクリーの態度が前年度から変わっていないことは、とても残念だ。時間がたてば彼女の気持ちも和らぐだろうと思っていたのだが。貴君の説明から判断すると、どうやら彼女の講義は新年度の学生の確保に役立ちそうもないようだ⁸⁹⁾。

バルクリーの意固地な態度と彼女の授業の不人気があいかわらずであることに、デューイはほとほと困惑している。そして、同じくニューヨーク州ハリケーンからの9月9日付のマニー宛の手紙で、次のように書いている。

私はミス・バルクリーに手紙を書き、次年度に実験学校の教室に使えそうな借家を貴君が4, 5軒見つけたことを知らせておいた。そして、貴君が彼女を連れてそれらを見にいきたいと言っていると書いておいた。だから、彼女からその話しがあった時には、どうかよろしく頼む。実際的な問題について彼女の判断は総じてすぐれている。もし彼女の方から言ってこなかつたら、貴君一人でことを進めてくれていい。私としては、彼女の判断をあおげることが一番いいと思っている⁹⁰⁾。

デューイは、扱いの面倒な准教授のバルクリーに何とか配慮するようにマニーに依頼している。9月14日付のマニー宛ての手紙でも、デューイは実験学校の入学案内をバルクリーに送ってあるから、彼女に目を通してもらったうえで早急に配布するようにとマニーに指示している。そして「実害がないかぎり、ミッセルと一緒になにごともバルクリーに相談して進めるように」とバルクリーへの特別な配慮をマニーに求め、「みんなで一緒にうまくやっていくように最大限の努力しようではないか」と結んでいる⁹¹⁾。

1897年1月はじめ、デューイはハーパー学長の諮問に答えて「教育学科整備拡充計画」を提出し、その中で附属小学校（実験学校）に「校長」（supervising principal）を置くことを要求している。この「校長」は単なる学校管理者ではなく、“supervising principal”という言い方に示されているように指導主事としての役割を果たす学校長が想定されていた。具体的には、大学院に学ぶ現職教員の院生に附属小学校で補助教師をやってもらいながら、彼らの指導・監督にあたる校長である⁹²⁾。同様の要求は、1897年12月にハーパー学長に書き送った教育学科の将来構想についての意見書でも触れられている。ここでは、大学院生の補助教師の指導・監督に加えて、大学で初等教育に関する授業を担当できることが想定されており、端的には学校の教師と大学の研究者の中間に位置する実践的教育研究者が想定されていた⁹³⁾。

デューイは、この仕事を准教授のバルクリーにはまったく期待できないと判断して、当面の措置としてフランク・マニーを大学院の現職研修教員として受け入れ、あわせて教育学科の助手とし実験学校の運営に携わってもらつたのであった。しかし、デューイとマニーとの間に仕事上の行き違いが生じて、デューイが謝罪するにいたつている⁹⁴⁾。そして、もう1年間助手を続けて欲しいというデューイの願いにも関わらず、マニーは1897年6月をもってシカゴを去っている。

その間の1897年2月、マニーはバルクリーが1896-97年度の冬学期に開講していた「近代ドイツ教育学」を受講し、その授業内容に関して、もう一人の受講生とともに痛烈な批判を加えた。この件でバルクリーはハーパー学長に手紙を書き、批判は「いわゆるドイツ教育学に関する偏見」に起因するもので、「シカゴ教育学」を扱えという彼らの要求は、普遍的原理を無視した目先の議論であつて、それはちょうどドイツ的要素を抜きにして聖書批判を教えろというようなものだと反論した。ちなみに、聖書批判はハーパー学長自身の専門であった。そして、バルクリーの授業はまるで

ハイスクール並みだという彼らの批判についても「まったくばかげている」と一蹴している⁹⁵⁾。

バルクリーはハーパー学長に「近代ドイツ教育」の授業概要を送り、ハーパーはそれをデューイに転送した。デューイはそれを見て、1897年2月23日付でハーパー学長宛てに次のように自分の意見を書き送っている。

文面はきわめて一般的で、少し漠然としているので、要は教え方しだいです。この授業計画では、実際的で系統的な仕方で教えることもできなくはありませんが、あいまいで一般的な扱いをすれば、何の成果もないものになるでしょう⁹⁶⁾。

バルクリーの「近代ドイツ教育」の授業概要に対するデューイの評価は、遠回しながら否定的であった。

バルクリーの辞職に向けて

先に記したように、フランク・マニーは1897年6月の年度の終了とともにシカゴを去っている。マニーが抜けた後、バルクリーの態度はやや好転したようである。1897年8月4日付の妻アリス宛ての手紙で、デューイは次のようにバルクリーの近況を報告している。

先日、彼女〔バルクリー〕が私のところにやってきて、この春の彼女の態度は正しくなかったと私は詫びの気持ちを伝えたいと言ってきた。そして、いま思えば、それは過労の結果で、そうとう疑心暗鬼になっていたと証明した。彼女は自分を取り戻したときは、けっこう人当たりのよい人なのだ⁹⁷⁾。

しかし、1897年12月6日付でハーパー学長に書き送った教育学科の将来構想について意見書の中で、デューイはバルクリーが再びかたくなな態度を示して、依頼した仕事をやってくれないことを嘆いている。この意見書の中でデューイは、実験学校に関する自分の職務は「教育内容の選択と相互の関連づけが正しくおこなわれているか監督することと、大学で実験学校の一般的な理論の背景にある哲学を講じることである」と説明したうえで、「個々の実務はバルクリー博士の手に委ねたけれども、説明するのもはばかれるようなささいな理由でやってもらえなかつたし、今後とも期待はできそうになく、彼女に実務的な仕事をきちんとやってくれるように期待するのは時間とエネルギーの無駄だと思っている」と書いている。そのうえで、デューイはハーパー学長にあらためて人事の要求をしている。すなわち、実験学校で大学院生の補助教師を指導・監督し、実験学校に関わりながら大学で初等教育に関する科目を教え、出版と講演によって実験学校の成果を広く普及させる仕事を担当できる人物の採用を求めた⁹⁸⁾。

バルクリーは、1898年の冬学期と春学期に休暇をとってヨーロッパ旅行に出かけた。デューイは、1898年1月23日付のハーパー学長宛ての書面で、彼女が春学期をどうするつもりでいるのか聞いていないかと尋ねている⁹⁹⁾。おそらく、バルクリーは春学期の予定についてデューイに何も言っていないかったのであろう。ハーパー学長は、彼女から1月1日付で届けがあったと記している¹⁰⁰⁾。

1898年2月27日付のフランク・マニー宛ての手紙で、デューイは、実験学校は順調にいっており「衝突らしい衝突は何も起こっていない」と近況を伝えている。そして「バルクリーは長期休暇をとっている——冬学期と春学期だ。戻ってきたら、彼女は女子学生監をやめ、ビーチャー・ホールを出ることになっている」と書いている¹⁰¹⁾。バルクリーは着任以来、教育学准教授のほかに女子学生監(dean of women)の役職をもち、ビーチャー・ホールという女子学生寮で女子学生の教育指導にあたっていたが、当初からもう一人の女子学生監であるマリオン・タルボット(Marion Talbot、彼女は衛生学助教授を兼務)との間で主導権争いを続けていて、評判のよくない彼女はハーパー学長から女子学生監を辞するよう再三にわたって求められていた¹⁰²⁾。ただし、実際に彼女が女子学生監をやめるのは1899年の8月である¹⁰³⁾。

帰国後、バルクリーは「一般教育学」(general pedagogy)の著書の執筆に専念した。しかし、その草稿を読んだハーパー学長の反応はきわめて否定的なものであった。ハーパー学長は、1899年1月3日付でバルクリーに宛てて、自分の率直な意見を書き送った。

同じことが何度も何度も述べられ、あまりにも繰り返しが多いので、私は学生たちがなぜ教育学に興味をもたないのか理由がわかった気がします。求められているのは、教育学を展開することで、教育学について解説することではありません。生きたメソッドを示すことで、メソッドについて論じることではありません。……

正直に言って、私は少しがっかりさせられました。貴女は「これまでそうした問題を考えたことがなかった」——つまり、授業の改善と充実について考えたことがなかったと言っています。私にはとても理解できないことです。3年も4年も教育学科で教えていて、そうした問題を考えたことがなかったというのは、まったくもってミステリーです¹⁰⁴⁾。

どうやらハーパー学長は、バルクリーの残された役職である教育学准教授についても、彼女の能力に疑惑をもちはじめていたようである。

バルクリーは、1899年1月9日付でハーパー学長に反論の手紙を書き、「教育学の系統的な教育」は教育の実践的なメソッドに関心をもっている人々にとっても重要だと主張した。そして、自分はシカゴのいろいろな学校や実験学校をよく参観していること、シカゴに来る前は学校現場で教師や管理職をしていたこと、チューリヒで理論研究をおこない、最近では専門雑誌に論文が掲載されていることなどをあげて、「大学に貢献するためにこれ以上何ができますでしょうか」と書いている¹⁰⁵⁾。

さらにバルクリーは、大学の提携校(affiliated schools)や協力校(cooperating school)との関係を密にする計画をハーパー学長に申し出たが、これについてハーパー学長は「あいまい模糊としている」と回答した。彼女の授業についても次のように指摘した。

教育学科が抱える問題の一つは、授業が多かれ少なかれ漠然としてわかりにくいという点にある。教育学の授業を取る学生がなぜこんなに少ないのか、これによって説明がつくでしょう¹⁰⁶⁾。

バルクリーは、ハーパー学長の批判こそ「あいまいでわかりにくい」と反論し、明確な説明を聞くために会見を申し入れた¹⁰⁷⁾。これに対してハーパー学長は、フォーラム誌に寄せられたバルクリーの論文に対する不評の手紙と、ハーバード大学のハナス教授 (Hanus) からの批判のコメントを彼女に送付し、さらにシカゴ大学教育学科に対するハナスの次のような厳しい評価も付け加えた。

残念ながら、こちら東部では、デューイ博士の授業以外にシカゴの教育学科にはたいしたものはないというのがおおかたの意見です。最近ここケンブリッジ [ハーバード大学] で開かれた大学院生協議会での自由討議では、デューイ博士が教育学科に関わっていることがシカゴの唯一の救いだという発言がありました¹⁰⁸⁾。

これに対してバルクリーは、自分の論文の評価について、ハナス教授は学校現場の経験がない人であり、彼のとは正反対の別の評価を自分は得ていると反論している¹⁰⁹⁾。しかし、シカゴ大学教育学科の評判については何も論及していない。ハーパー学長は、追い撃ちをかけるように、大学院生からその翌週に提出された批判意見のレポートをバルクリーに送付した。バルクリーは「ここにあるような批判に基づくならば、最高度の天分をもたず、しばしば授業が休講になり、組織力にかける人物は、だれも採用されてはならないということになる」と応じたが、ハーパー学長自身が大学院生の批判を支持すると言うなら、辞表を書くことも辞さないと書いた¹¹⁰⁾。

エラ・フラッグ・ヤングの採用とバルクリーの辞職

こうしてバルクリーが女子学生監の辞職に加えて、教育学准教授についても次第に辞職をよぎる一方で、1898年の2月ごろから、ハーパー学長とデューイはエラ・フラッグ・ヤングを教育学科のスタッフに採用しようと動きはじめていた。ヤングはバルクリー同様、長い教職経験をもち、1887年以降はシカゴの学区教育長 (district superintendent of schools) をしていたが、1895年10月、50歳で現職のままパートタイム学生として大学院に入学し、デューイのもとで哲学を専攻していた。ヤングは、教育行政官としてシカゴの公立学校の教師たちの間で信頼が厚く、シカゴ市の教育委員会の委員であったハーパー学長も、彼女の教育行政官としての指導力を高く評価していた。

1898年3月1日付のハーパー学長宛ての文書の中で、デューイはかねてからヤングに申し入れていた春学期（4月開始）の授業担当について、彼女は「最終的に受けてくれるでしょう」が、本職との関係で週2時間以上はやれそうもないと言っているとハーパー学長に伝えている¹¹¹⁾。『シカゴ大学年次報告』1897-98年度版によると、ヤングは1898-99年度の秋学期（1898年10月開始）と、続く1899年の冬学期（1899年4月開始）に、教育学科の大学院課程でそれぞれ1科目ずつ授業を開講することになっている¹¹²⁾。しかし、実際にはヤングはいずれの授業もおこなわなかった。理由は、学位なしで大学院の授業をおこなうことをヤング自身が躊躇したためである¹¹³⁾。

1898年6月、ハーパー学長はヤングに1900-1901年度から教育学准教授に採用したいと申し出た。しかし、学位がないことを理由に彼女は受諾を保留した。ヤングは、1898年10月28日付のハーパー学長宛の手紙で、10月26日にデューイと学位論文のテーマおよび学位取得に必要な講読文献について短く話しあったと書いている。そして、1900-1901年度から教育学准教授に採用するという話について、ハーパー学長に詳しい予定を尋ねている¹¹⁴⁾。どうやら、ヤングは2年程度かけて学位を取得し、その後学区教育長をやめてシカゴ大学の教育学准教授になるつもりであったようだ。

しかし、ヤングは翌年（1899年）の6月、新任の教育長であるベンジャミン・アンドリューズ（Benjamin Andrews）と対立して学区教育長を辞職して（6月3日付）¹¹⁵⁾、1899年10月の秋学期からフルタイム学生としてデューイの指導のもとで学位論文の研究に専念した。論文のテーマは“Isolation in the Schools”であった。

ヤングが学区教育長を辞職した直後の1899年6月23日付で、G.H.ミードはカリフォルニアに講演旅行中のデューイに宛てて手紙を書き、その中で、ヤング夫人が来年（1900年）から専任講師（professorial lecturer）に就任することになったことをハーパー学長から知らされたと書いている。そして、「たぶん確実だと思うけれど、ミス・バルクリーが健康上の理由で辞職することになれば（ハーパーはうつむきながらそう言った）、ヤング夫人が彼女のポスト〔教育学准教授〕に移ることになる」と、バルクリーの辞職がもはや時間の問題になっていることを示唆している。さらにミードは、ヤングについて「今年〔ヤングがフルタイム学生となる1899年10月からの意味であろう〕ティーチャーズ・カレッジ〔教育学科の学部課程〕で教え、たぶん大学小学校の仕事もすることになろう（おそらく主事directorとして）」と述べており、かねてからデューイがハーパー学長に必要性を訴えていた実験学校の主事（director）の仕事をヤングがやることを知らせている。そして、次のように書いている。

もしヤング夫人が校長をやることになれば、最高の人選だと思う。彼女以上に教育現場の実践に通じていて、しかも教育改革に向けたさまざまな考え方や意見を熟知している人を見つけることは困難だろう。この任命でシカゴ市の教師たちを大学に引きつけることができるという利点に、ハーパー氏はとりわけ心を動かされたのだと思う¹¹⁶⁾。

学区教育長としてシカゴ市の教師たちの間で信頼の厚かったヤングが、大学で教育学を講じながら、名高いデューイの実験学校で補助教師に対する実践指導もおこなうとすれば、かなりの数の現職教員がシカゴ大学教育学科に入学を希望することになる——これはハーパー学長の読みであったとともに、デューイ自身のねらいでもあったはずである。

しかしながら、ヤングはなおも学位がないことを理由に大学のファカルティの一員になることをためらった。1899年11月16日付でデューイは、彼女に学士号（bachelor's degree）の資格を認定する件で、学生部長（Dean of Faculties of Arts, Literature, and Science）のハリー・ジャドソン（Harry P. Judson）から手紙を受け取った。ジャドソンは、彼女の学士号には一年間の履修

が必要になるだろうと書いてきた¹¹⁷⁾。デューイは同日付でハーパー学長に手紙を送り、ジャドソンの手紙を同封して、「ヤング夫人はいまは少々手に負えない状態なので、もしこの措置〔一年間の履修が必要という措置〕がとられたら、きっと大学との関係を御破算にしてしまうでしょう」と書いた¹¹⁸⁾。この警告が効を奏したかどうかはわからないが、ヤングは1899年12月に学士号を取得し、ただちにデューイに協力して実験学校の仕事にとりかかった。1899年12月2日付のハーパー学長宛ての手紙で、ヤングは次のように書いている。

デューイ氏と私は「大学小学校を教育学科にとって真に役立つようにするためにどうしたらよいか」を慎重に考えているところです。私の計画では、全面的かつ詳細なレポートをデューイ氏に提出する予備段階として、私が今週の後半から当校の理論と方法を明らかにする研究を始めます¹¹⁹⁾。

1899年12月21日付のハーパー学長宛ての文書の中で、デューイは次年度（1900－1901年度）の教育学科の授業計画を決定するためにも、ヤングの准教授就任の件を早く決定して欲しいと促している¹²⁰⁾。同じ文書で、デューイは哲学科と教育学科のスタッフの次年度夏学期の予定を書いているが、その中でバルクリーについても「間違いなく夏の間ずっと、または部分的にシカゴにいるでしょう」と書いている。つまり、夏学期の授業を担当できるといっているわけで、この時点ではまだ彼女の辞職は決まっていなかったようである。

1900年3月3日付のフランク・マニー宛ての手紙で、デューイはヤングが夏学期（7月開始）から大学で正規の仕事をすることになったと知らせている¹²¹⁾。同じ頃、バルクリーはハーパー学長に辞職を申し出た¹²²⁾。そして、1900年の冬学期をもってシカゴ大学を去り、直後の4月に56歳で結婚し、その後はミネアポリス＝セントポール地域で教育・宗教問題についての講演や著述の仕事をおこなった¹²³⁾。他方、ヤングは1900年の夏学期からバルクリーに代わって教育学准教授に就任し、ようやく教育学科の授業を担当することになった。そして、1900年8月に博士号を取得し、10月からは教授（full professor）に昇格した¹²⁴⁾。

註

- 1) Ida B. DePencier, *The History of the Laboratory Schools : The University of Chicago 1896 - 1965* (Chicago : Quadrangle Books, 1967), p. 13.
- 2) University of Chicago Board of Trustees to whom it may concern, May 12, 1896.
- 3) Nellie B. Linn to John Dewey, July 11, 1896 ; John Dewey to Frank A. Manny, July 22, 1896.
- 4) John Dewey to William Rainey Harper, November 12, 1896.
- 5) John Dewey to Thomas W. Goodspeed, November 23, 1896.
- 6) Ibid.
- 7) John Dewey to Thomas W. Goodspeed, December 9, 1896.
- 8) *University Record*, The University of Chicago, vol. 1, no. 41, January 8, 1897, p. 519.
- 9) Ibid.
- 10) John Dewey to Frank A. Manny, July 16, 1897. ここに出ているレイヤーソン氏は、シカゴの材

木商でシカゴ大学の最初の理事の一人であり、シカゴ大学のレイヤーソン物理学実験棟（現レイヤーソン・ホール）の建設に資金を出している。

- 11) John Dewey to William Rainey Harper, November 8, 1897. この手紙でキャロライン・キャッスル嬢はミード夫人と同じ住所となっているので、たぶん彼女はミード夫人の縁戚者かと思われる。ちなみに、ミード夫人はハワイのキャッスル家の出身である。
- 12) *University Record*, The University of Chicago, vol. 1, no. 47, February 19, 1897, pp. 575. なお、ケディはデューイとともにジェーン・アダムスのハルハウスの活動にも関係しており、ハルハウスで貧困地域の子どもたちを集めて音楽教室を開いていた。John Dewey to Frederick A. & Evelyn Dewey, September 14, 16, 1894.
- 13) Cornelia S. Crane to John Dewey, November 10, 1897.
- 14) *University Record*, The University of Chicago, vol. 2, no. 8, May 21, 1897, p. 69; *University Record*, vol. 2. no. 9, May 28, 1897, p. 80; *University Record*, vol. 2. no. 12, June 18, 1897, p. 115; *University Record*, vol. 2. no. 13, June 25, 1897, p. 124, 参照。
- 15) John Dewey to William Rainey Harper, December 6, 1897.
- 16) John Dewey, "Plan for Organization of Work in a Fully Equipped Department of Pedagogy," in *Early Works of John Dewey* vol. 5, pp. 443–447; John Dewey to William Rainey Harper, January 8, 1897.
- 17) John Dewey, "Pedagogy as a University Decipline," *University Record*, The University of Chicago, vol. 1, no. 25, September 18, 1896, pp. 353–355, and vol. 1, no. 26, September 25, 1896, pp. 361–363.
- 18) 拙稿「シカゴ大学実験学校の創設の背景にあったデューイの教育学構想——師範教育から教育科学の確立へ——」『鹿児島大学教育学部紀要・教育科学編』第50巻, 1999年3月, 219–227頁参照。
- 19) John Dewey to William Rainey Harper, December 6, 1897.
- 20) Ibid.
- 21) Dewey, "Plan for Organization of Work in a Fully Equipped Department of Pedagogy," *Early Works of John Dewey* vol. 5, p. 447.
- 22) Willam Rainey Harper to John Dewey, December 23, 1897, cited from Woodie Thomas White, "The Study of Education at the Univewrsity of Chicago," unpublished Ph. D. dissertation, The University of Chicago, 1977, p. 56.
- 23) John Dewey to Frank A. Manny, February 27, 1898.
- 24) John Dewey to Willian Rainey Harper, December 6, 1897.
- 25) "The University Elementary School: General Information," *University Record*, vol. 2, no. 38, December 17, 1897, p. 303.
- 26) 詳細は、拙稿「シカゴ大学実験学校の実践記録：1896–1899」『鹿児島大学教育学部紀要・教育科学編』第51巻, 2000年3月, 156–170頁参照。
- 27) John Dewey to William Rainey Harper, June 23, 1898.
- 28) Ibid. なお、『大学広報』1897年12月17日号に掲載された実験学校の概要報告では、年少児〔5～7歳〕のクラスは8名までに制限されており、将来的には12歳以後は12～15名に増やすことになるだろうと記されている。直接記されてはいないが、7～11歳児のクラスはたぶんその間の人数、つまり8～12名であったろう。"The University Elementary School: General Indomation," *University Record*, vol. 2, no. 38, December 17, 1897, p. 304.
- 29) John Dewey to William Rainey Harper, June 23, 1898.
- 30) Ibid.
- 31) シカゴ大学の「年次記録」を見ると、ローラ・ラニアンが実験学校の教師として「年次記録」に記載されているのは1900–01年度からである。しかし、ネリー・グリフィスによれば、ラニアンは1898年に採用されている。Nellie Lucy Griffiths, "A History of the Organization of the Laboratory School of the University of Chicago," unpublished M. A. dissertation, The University of Chicago, 1927, p. 74. また、デューイ自身の1898年11月16日付の手紙にも「われわれの歴史の教師であるラニア

ン嬢」とあるから、ラニアンが1898-99年度に実験学校で教師をしていたことは確かである。John Dewey to Frank A. Manny, November 16, 1898. ただし、それが常勤の教師としてなのか、非常勤の補助教師としてなのはわからない。ラニアンの名前が1900-01年度の「年次記録」までは記載がないことから考えて、おそらくは非常勤だったのではないだろうか。

- 32) John Dewey to William Rainey Harper, June 23, 1898.
- 33) Nellie B. Linn to John Dewey, July 29, 1898.
- 34) John Dewey to William Rainey Harper, March 6, 1899. エドワード・バトラーは、シカゴの交易商で、慈善家であり、シカゴ美術館理事、ハルハウス理事も務めている。
- 35) John Dewey to William Rainey Harper, March 8, 1899.
- 36) Ibid.
- 37) デューイは1899年の春学期 (Spring Quarter) にシカゴ大学から休暇を取っている。University Record, The University of Chicago, vol. 4, no. 15, July 14, 1899, p. 90. 4月19日付のデヴィッド・スター・ジョーダン宛の手紙でデューイは「ちょうどカリフォルニアに出発しようとしているところに12日付のあなたの手紙が届きました。今は簡単な返事だけですませますが、2~3週間すれば会ってお話しできるでしょう」と書いている。John Dewey to David Star Jordan, April 19, 1899. ちなみに、ジョーダンはスタンフォード大学の学長である。デューイは4月下旬から7月下旬までカリフォルニア州サンタバーバラに滞在し、その間カリフォルニア大学バークレー校で講義をおこなっている。そして、7月27日にサンフランシスコからハワイのホノルルに向けて出航した。John Dewey to Frank A. Manny, July 26, 1899. デューイは、ホノルル・ハイスクールで「児童の生活」(The Life of Child) と題する大学公開講座を合わせて5回、「19世紀の思想動向」(Movements in Nineteenth Century Thought) と題する大学公開講座を合わせて5回おこなっている。“Textual Commentary,” *The Middle Works of John Dewey* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1976) vol. 1, p. 383; John Dewey to Dewey children, August 7, 8, 1899. そして、9月19日にホノルルを出航して、サンフランシスコに9月25日ないし26日に到着、シカゴには10月15日に戻っている。John Dewey to Dewey children, September 2, 1899; John Dewey to Frank A. Manny, November 1, 1899.
- 38) University of Chicago Friends of the Elementary School to William Rainey Harper, May 31, 1899.
- 39) John Dewey, “The University Elementary School,” first published in *The President's Report: July 1898 - July 1899* (Chicago: The University of Chicago Press, 1900), *Middle Works of John Dewey*, vol. 1, pp. 317-318.
- 40) William Rainey Harper to E. A. Turner, August 15, 1899.
- 41) Ibid.
- 42) John Dewey to Paul Carus, September 16, 1898. この手紙でデューイは、実験学校の授業は10月3日から開始すると書いている。
- 43) John Dewey to Frank A. Manny, August 2, 1896. この手紙によれば、1896年の夏季休暇中にデューイは10月の新学期から実験学校に「幼稚園」(Kindergarten) を開設することを考えていたが、あきらめている。
- 44) John Dewey to Flora J. Cooke, August 16, 1898; John Dewey to Flora J. Cooke, October 1, 1898.
- 45) John Dewey to Flora J. Cooke, August 16, 1898. 授業は10月3日から始まった。John Dewey to Paul Carus, September 16, 1898.
- 46) Alice Chipman Dewey to Flora J. Cooke, September 16, 1898.
- 47) John Dewey to Flora J. Cooke, September 20, 1898.
- 48) *The Annual Register: July 1898 - July 1899*, The University of Chicago (Chicago: The University of Chicago Press, 1899), p. 184. John Dewey to Dewey children, September 1, 1899; John Dewey to Dewey children, September 5, 1899.
- 49) Florence La Victoire to Alice Chipman Dewey, December 31, 1899.
- 50) John Dewey to William Rainey Harper, December 6, 1897.

- 51) John Dewey to James Earl Russell, January 6, 1899.
- 52) James Earl Russell to John Dewey, January 23, 1899.
- 53) John Dewey to Frank A. Manny, July 26, 1899.
- 54) John Dewey to Frank A. Manny, July 26, 1899.
- 55) John Dewey to William Rainey Harper, April 28, 1897.
- 56) Ibid.
- 57) *Annual Register: July 1898 – July 1899*, The University of Chicago (Chicago : The University of Chicago Press, 1899), pp. 184–187, 参照。
- 58) 註37) を参照。
- 59) Nellie Lucy Griffiths, "A History of the Organization of the Laboratory School of the University of Chicago," unpublished M. A. dissertation, The University of Chicago, 1927, pp. 8–9 ; Ida B. DePencier, *The History of the Laboratory Schools, The University of Chicago, 1896 – 1965* (Chicago : Quadrangle Books, 1967), pp. 39–40.
- 60) G. Stanley Hall to Anita McCormick Blaine, April 13, 1899. この手紙の中でホールは「貴女の抱いておられるような構想が実現すれば、この国はもとより諸外国にとっても教育関係者のメッカとなるような機関が生まれることになるでしょう」と書いている。
- 61) John Dewey to Jane Addams, April 26, 1899.
- 62) John Dewey to Frank A. Manny, July 26, 1899.
- 63) John Dewey to Frank A. Manny, November 1, 1899.
- 64) John Dewey to Anita McCormick Blaine, November 1, 1899.
- 65) *University Record*, The University of Chicago, vol. 4, no. 32, November 10, 1899, pp. 194, 196.
- 66) Newman Miller to John Dewey, March 27, 1900 ; Newman Miller to William Rainey Harper, June 23, 1900.
- 67) John Dewey, "The University Elementary School," (1900) *Middle Works of John Dewey*, vol. 1, p. 317 ; Newman Miller to John Dewey, March 27, 1899.
- 68) Newman Miller to John Dewey, March 27, 1900. なお、1900年2月27日付のブレイン夫人宛ての手紙の中で、デューイは夫人に『学校と社会』の第2刷を送ったと記しているので、第2刷は1900年2月下旬に出されたと思われる。John Dewey to Anita McCormick Blaine, February 27, 1900.
- 69) Newman Miller to John Dewey, April 21, 1900. シカゴ大学出版に対するデューイの不満を直接知る文書資料はないが、ミラーがデューイに宛てたこの手紙からデューイの不満の内容が間接的に知られる。ミラーは、出版費用の請求額が当初の請求額よりも高くなつた理由について、労賃と原材料費の高騰、第1刷の誤字・脱字の修正とデューイ自身による書き換えによる校正作業の費用、表紙の印刷に用いた電気製版の費用などをあげている。
- 70) Newman Miller to John Dewey, April 23, 1900.
- 71) Newman Miller to John Dewey, May 19, 1900. 「学校と社会」の第1刷と第2刷は活字組版 (standing type) で印刷されたが、第3刷以降はプレート版印刷 (a single set of plates) で印刷された。“Textual Commentary,” *Middle Works of John Dewey*, vol. 1, p. 364.
- 72) Newman Miller to John Dewey, June 11, 1900.
- 73) John Dewey to Univ. of Chicago Press, June 12, 1900.
- 74) Newman Miller to William Rainey Harper, June 23, 1900.
- 75) Newman Miller to John Dewey, April 23, 1900.
- 76) Newman Miller to William Rainey Harper, June 23, 1900.
- 77) John Dewey to William Rainey Harper, June 28, 1900.
- 78) 「学校と社会」の出版の歴史については、“Textual Commentary,” *Middle Works of John Dewey* vol. 1, pp. 361–370, を参照。
- 79) John Dewey, “The University Elementary School” first published in *The President's Report: July 1898 – July 1899* (Chicago : The University of Chicago Press, 1900), *Middle Works of John Dewey*, vol. 1, p. 318.

- 80) *Ibid.*, p. 319.
- 81) バルクリーの任命に至る詳しい経過については, Robert L. McCaul, "Dewey's Chicago," *The School Review*, Summer 1959, p. 259; Woody Thomas White, "The Study of Education at the University of Chicago, 1892–1958," unpublished Ph. D. dissertation, The University of Chicago, 1977, pp. 23–25; Kathlenn Cruikshank, "In Dewey's Shadow: Julia Bulkley and the University of Chicago Department of Pedagogy, 1895–1900," *History of Education Quarterly*, vol. 38, no. 4, 1998, pp. 376–379, 参照。
- 82) シカゴ大学教育学科は大学院大学の教育学科であり, したがって少数のシニア・カレッジ課程 (Senior College Course) 向けの科目を除いて, 開設科目のほとんどは大学院課程 (Graduate Course) 向けの科目である。実際の開講科目と担当者については, シカゴ大学の『年次記録』(Annual Register) の1895–1896年度以降の各年度版に掲載の教育学科の開設科目一覧を参照。
- 83) Julia Bulkley to William Rainey Harper, December 28, 1895, cited from Cruikshank, op. cit., p. 389.
- 84) White, op. cit., p. 29; Cruikshank, op. cit., p. 388.
- 85) John Dewey to William Rainey Harper, January 11, 1896.
- 86) *Ibid.*
- 87) Julia Bulkley to William Rainey Harper, May 25, 1896.
- 88) Cruikshank, op. cit., p. 391, 参照。
- 89) John Dewey to Frank A. Manny, September 4, 1896.
- 90) John Dewey to Frank A. Manny, September 9, 1896.
- 91) John Dewey to Frank A. Manny, September 14, 1896.
- 92) John Dewey to William Rainey Harper, "Plan for Organization of Work in a Fully Equipped Department of Pedagogy," January 8, 1897, *Early Works of John Dewey*, vol. 5, 47.
- 93) John Dewey to William Rainey Harper, December 6, 1897.
- 94) John Dewey to Frank A. Manny, [January 1897?] デューイとマニーの間でどのような行き違いがあったのか, 具体的なことはわからない。
- 95) Cruikshank, op. cit., p. 394, 参照。
- 96) John Dewey to William Rainey Harper, February 23, 1897.
- 97) John Dewey to Alice Chipman Dewey, August 4, 1897.
- 98) John Dewey to William Rainey Harper, December 6, 1897.
- 99) John Dewey to William Rainey Harper, January 23, 1898,
- 100) William Rainey Harper to John Dewey, January 23, 1898.
- 101) John Dewey to Frank A. Manny, February 27, 1898.
- 102) Cruikshank, op. cit., pp. 392–393, 395, 396, 参照。
- 103) Julia Bulkley to William Rainey Harper, August 10, 1899, Cruikshank, op. cit., p. 398. 参照。
- 104) William Rainey Harper to Julia Bulkley, January 3, 1899, cited from Cruikshank, op. cit., p. 396.
- 105) Julia Bulkley to William Rainey Harper, January 9, 1899, cited from Cruikshank, op. cit., p. 397.
- 106) William Rainey Harper to Julia Bulkley, January 10, 1899.
- 107) Julia Bulkley to William Rainey Harper, January 11, 1899, Cruikshank, op. cit., p. 397, 参照。
- 108) William Rainey Harper to Julia Bulkley, January 13, 1899, cited from Cruikshank, op. cit., p. 398.
- 109) Julia Bulkley to William Rainey Harper, January 14, 1899, Cruikshank, op. cit., p. 397, 参照。
- 110) Julia Bulkley to William Rainey Harper, January 23, 1899, Cruikshank, op. cit., p. 398, 参照。
- 111) John Dewey to William Rainey Harper, March 1, 1898.
- 112) *Annual Register, The University of Chicago: July 1897–July 1898* (Chicago: The University of Chicago Press, 1899), p. 178. ちなみに, 1898年秋学期の授業題目は "A Study of the Parts

of School Systems”であり、1899年冬学期の授業題目は“Positive and Negative Factors in Education”，1899年春学期の授業題目は“Fundamental Principles Underlying Nineteenth Century Theories of Education”であった。

- 113) Rosemary V. Donatelli, “The Contributions of Ella Flagg Young to Educational Enterprise,” unpublished Ph. D. dissertation, The University of Chicago, 1971, pp. 144–145, 参照.
- 114) Ella Flagg Young to William Rainey Harper, October 28, 1899.
- 115) Cruikshank, op. cit., p. 399, 註43.
- 116) George Herbert Mead to John Dewey & Alice Chipman Dewey, June 23, 1899.
- 117) Harry P. Judson to John Dewey, November 16, 1899.
- 118) John Dewey to William Rainey Harper, November 16, 1899.
- 119) Ella Flagg Young to William Rainey Harper, December 2, 1899.
- 120) John Dewey to William Rainey Harper, December 21, 1899.
- 121) John Dewey to Frank A. Manny, March 3, 1900, Cruikshank, op. cit., p. 399, 参照.
- 122) Julia Bulkley to William Rainey Harper, March 9, 1900.
- 123) Cruikshank, op. cit., p. 399–400.
- 124) Ibid., P. 399.